

「この人は神の子だった」

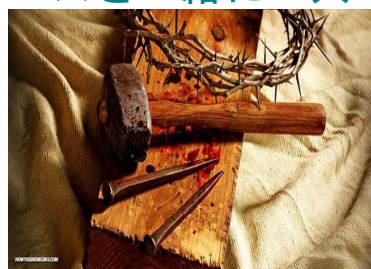
マルコ15:25-41

挽地 茂男

2019.9.22 日本基督教団千歳丘教会

今日は主イエスの十字架の場面です。マルコ15章25－28節。

「15:25 イエスを十字架につけたのは、午前九時であった。15:26 罪状書きには、『ユダヤ人の王』と書いてあった。15:27 また、イエスと一緒に二人の強盗を、一人



は右にもう一人は左に、十字架につけた。15:28 (※

底本に節が欠落異本訳) こうして、「その人は犯罪人の一人に数えられた」という聖書の言葉が実現した。」兵士たちは主イエスに「没薬を混ぜたぶどう酒」を吞ませようとして(v.23)拒否されますが、それでもいつもと同じく型どおり作業を行って、主イエスの処刑を開始します。主イエスを含む罪人たちを十字架につけ終わると、主イエスの衣服を分けるために、兵士はくじ引きを始めます。罪状書きには「ユダヤ人の王」(INRI = Iesus Nazaraius Rex Iudaeorum)

と記されています。悪趣味な侮蔑的な罪状書きです。左右の十字架には強盗が磔にされています。

「強盗と共に十字架につけられた」という屈辱感を緩和するために、後代の写本は「こうして、『その人は犯罪人の一人に数えられた』という聖書の言葉が実現した」というルカ福音書から採った言葉を28節に付加しました。)人々も主イエスを嘲笑します。29－32節。まずは「通行人」です(v.29-30)。「15:29 そこを通りかかった人々は、頭を振りながらイエスをののしって言った。『おやおや、神殿を打ち倒し、三日で建てる者、15:30 十字架から降りて自分を救ってみろ』。」さらに祭司長たちと律法学者が追い打ちをかけます(v.31-32a)。「15:31 同じように、祭司長たちも律法学者たちと一緒に、代わる代わるイエスを侮辱して言った。『他人は救ったのに、自分は救えない。15



ヨハネ福音書によれば罪状は三つの言語で記された

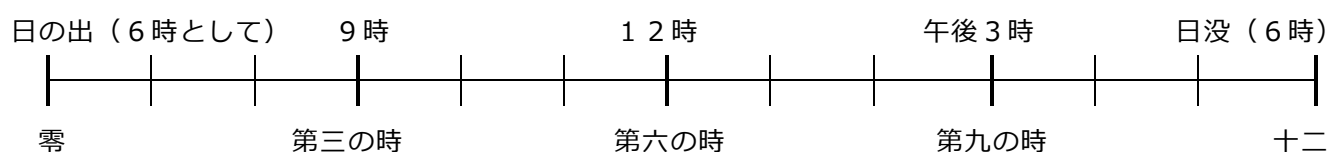
:32 メシア、イスラエルの王、今すぐ十字架から降りるがいい。それを見たら、信じてやろう。」これだけではないのです。さらに十字架につけられた強盗たちもイエスを罵ります(v.32b)。ルカ福音書では主イエスと強盗たちの長い対話が記されますが、マルコでは一言「15:32b …一緒に十字架につけられた者たちも、イエスをののしった。」侮蔑と屈辱と罵りがゴルゴタの丘に渦巻きます。

マルコは主イエスが十字架にかけられた時間をわざわざ記しています。25節。「イエスを十字架につけたのは、午前九時であった。」原語では**第三の時**(ὥρα τρίτη)となっています。これは古代ローマの時間の表し方(表記方法)で——日時計を使いますので——日の出から日没までを12に分けて、日の出から3つ目の「時」が**第三の時**(ὥρα τρίτη)となります。季節によって異なりますが、例えば、日の出がわれわれの使う



古代ローマ時代の日時計(約2000年前)

時計〔グリニッジ標準時 GMT あるいは、それを概念修正した協定世界時 UTC〕の午前6時で日没が午後6時であれば、**第三の時**はわたしたちの時計の午前9時になります。〔新共同訳は現代人にわかりやすく現代の自国表記の仕方にあわせて訳しています。〕ですからこの後33-34節に出てくる「昼の12時」は原文では**第六の時**、午後の「3時」は原文では**第九の時**になります。つまりマルコは時刻を克明に告げて、この場面を「時」の**三重のパターン**で仕上げているのです。つまり(1)15:25 イエスを十字架につけたのは、**第三の時**(新共同訳=午前9時)



であった。(2)15:33 **第六の時**
(ὥρας ἑκτῆς=昼の12時)になると、全地は暗くなり、それが**第九の時**(ὥρας ἐνάτης=3時)まで続いた。そして(3)15:34 **第九の時**(3時)にイエスは大声で叫ばれた。「エロイ、エロイ、レマ、サバクタニ。」このようにマルコは、三、六、九と時間を刻みながら、十字架に「渡されていく」主イエスの死のクライマックスへの高まりを表現するのです。刻々と順々に救いが完成されていくのです。

ゲツセマネで、主イエスはこう祈られたのでした。14章35-36節。「14:35 少し進んで行って地面にひれ伏し、できることなら、この苦しみの **時 ἡ ὥρα** が自分から過ぎ去るようにと祈り、14:36 こう言われた。『アッバ、父よ、あなたは何でもおできになります。この杯をわたしから取りのけてください。しかし、わたしが願うことではなく、御心に適うことが行われますように』。」また、14章41節。「14:41 イエスは三度目に戻って来て言われた。『あなたがたはまだ眠っている。休んでいる。もうこれでいい。**時 ἡ ὥρα**

が来た。人の子は罪人たちの手に引き渡される』。」マルコによる福音書では、「**時**」(ἡ ὥρα)は、主イエスの逮捕で始まり、十字架でその頂点を極めるイエスの受難の象徴となっているのです。

第六の時(ὥρας ἑκτῆς)つまり昼の12時になると、全地が暗くなり、それが**第九の時**(午後3時)までつづきます。33-34節。

「15:33 昼の十二時になると、全地は暗くなり、それが三時まで続いた。15:34 三時にイエスは大声で叫ばれた。「エロイ、エロイ、レマ、サバクタニ。」これは、「わが神、わが神、なぜわたしをお見捨てになったのですか」という意味である。」昼の12時(ὥρας ἑκτῆς, **第六の時**)になると、全地は暗くなりました。つまり日時計はもう使えません。時間を計れたのは、太陽のおかげだったのです。この暗闇は、実は、時が神のものであったことを示します。

今は神の闇が全地を覆っています。時は人間のものではありません



ん。人間は賢く、時を刻み歴史を形成してきたつもりでしょうが、人間はそれほど利口ではありません。人間が歴史に残した傷跡を見れば分かります。原子の構造を解明して、そのエネルギーを利用することに成功しました。なるほど利口かも知れません。しかし、それを殺傷兵器に利用して、一時に



何十万人もの人を殺戮する。それを軍事力として保有し、相互に

威嚇し合いながら自国に有利な条件を引き出すために、政治的な交渉の道具にする。現在世界には、**約2万基の核弾頭が配備されている、とされています。これは実に、かつて広島に投下された原子爆弾120万個分にあたります。**どう見ても賢いとは思えません。賢いと標榜する人間たちの愚行が世界には満ち、正義を標榜する為政者たちの不正義が世界には満ちているではありませんか。

ゴルゴタの丘を覆ったこの闇は日食でしょうか。全地が暗くなりました。日食ではないと思います。日食

であれば日食と書いたでしょう。日食の観測記録は紀元前1900年くらいから残っていますから。ギリシア語でも当然それを表す言葉（*ἔκλειψις* 〈原意〉力を失う）が残っていますから。これは通常 of 自然現象ではなく、特別な天変地異を指しています。異常な現象という意味での「異象」のひとつです。古代の文献では、偉人の死に天地が共に悲しみ、暗黒がともなうという記述が出てきます。例えば(1)ユリウス・カエサル(ジュリアス・シーザー)の死に際して「太陽が光を失った」という記述がヴェルギリウスの『アグリコラ』(『農耕詩』)という作品に出てきます。また異象は暗黒だけではなく地震その他のものの場合もあります。仏典では、(2)尊師(釈迦)がお亡くなりになったとき、「入滅とともに大地震が起こった。人々は恐怖して、身の毛が逆立ち、また天の鼓(=雷鳴)が鳴った」(『大パリニッパナ経』[大般涅槃経])という記述が出てきます。(3)マルコはこの暗黒(異象)を主イエスが真の神の子〔cf. **カエサルは神格化されてローマの元老院から「神」と呼ばれ、その養子アウグストゥスは「神の**

子」と呼ばれた。歴代のローマ皇帝は、拒絶する物もあったが、総じて「神」や「神の子」と呼ばれた〕であることの徴として見ている可能性があります。また旧約聖書において「暗黒」は、神の審きの象徴として用いられます(イザヤ13:9ff.、エレミヤ15:6-9、ア



モス8:9)。例えばアモス書8章9節。「アモ8:9 その日が来ると、と主なる神は言われる。わたしは真昼に太陽を沈ませ／白昼に大地を闇とする。」

旧約聖書に馴染んでいたユダヤ人にとって、この暗黒は「その日」つまり終りの日の審きを連想させたでしょう。終りの日があたえる連想は、ユダヤ人の間では、もう一つの聖書箇所、マラキ書に結びつきます。マラキ書3章23節。

「マラ3:23 見よ、わたしは／大いなる恐るべき主の日が来る前に／預言者エリヤをあなたたちに遣わす。」アモス書の「暗黒」にマラキ書のエリヤの連想が重なります。ですから3時(第九の時)にな

って、再び光がもどり、主イエスが「エロイ、エロイ、レマ、サバクタニ」と叫ばれた時に、人々は「エリヤ」を呼んでいると錯覚したのです。人々の慌てぶりが見えるようです。35－36節。「15:35 そばに居合わせた人々のうちには、これを聞いて、『そら、エリヤを呼んでいる』と言う者がいた。15:36 ある者が走り寄り、海綿に酸いぶどう酒を含ませて葦の棒に付け、『待て、エリヤが彼を降ろしに来るかどうか、見ていよう』と言いながら、イエスに飲ませようとした。」死を見ることなく天に昇ったあのエリヤが再来して人々の愚行を審き、イエスを救いに来る、と連想が走ります。しかし37節。「15:37 しかし、イエスは大声を出して息を引き取られた。15:38すると、神殿の垂れ幕が上から下まで真っ二つに裂けた。」エリヤの助けは必要ではありませんでした。救いは完成したのです。「神殿の垂れ幕が上から下まで真っ二つに裂けた」のです。

神殿の垂れ幕のどの垂れ幕を指しているのか明確ではありませんが、可能性として二つあります。その垂れ幕が(a)一番奥の「至聖

所」と「聖所」の間を区別する垂

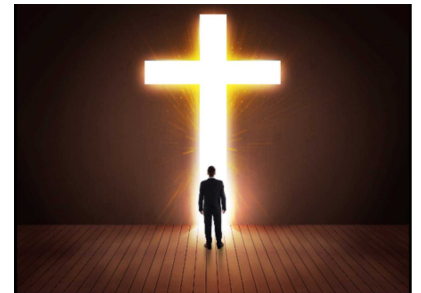


れ幕であれば、神と人間を分ける聖俗の区別を象徴す

る垂れ幕が取り除かれたことになります。あるいはそれより手前の(b)聖所の前の垂れ幕であれば、その垂れ幕には「十二宮図」が刺繍されており、「十二宮図」は宇宙や世界を象徴しますので、世界の中心を標榜していた神殿の崩壊のしるしと考えることもできますし、それゆえ、神殿に頼るユダヤ人に対する審判と考えることも出来ます(cf. 12:1-12)。また一般に「十二宮図」は宇宙全体を象徴するものですから、宇宙の崩壊つまり終末的予兆と考えることもできます(cf. 13:24-26)。いずれに致しましても、神殿制度の崩壊、あ



るいは宇宙的な崩壊を通して、神が神であることを顕らかにされる時が来たのです。今や神に到る道が開かれたのです。ヘブライ人への手紙の10章19-20節。「ヘブル10:19 それで、兄弟たち、わたしたちは、イエスの血によって聖所に入れると確信しています。10:20 イエスは、垂れ幕、つまり、御自分の肉を通して、新しい生きた道をわたしたちのために開いてくださったのです。」



「エロイ、エロイ、レマ、サバクタニ。」これは、エリヤを呼ぶ言葉ではありませんでした。これはこれは今日読んだ詩編22編2節の言葉です〔マタイは「エリ、エリ、レマ、サバクタニ」(עֲזִיבֵנִי לַמָּוֶת אֱלֹהִי אֱלֹהִי)とマルコのアラム語をヘブライ語表記に修正。エリヤ連想の明確化か？エリヤ＝エリ(わが神)＋ヤ(ヤハウエ、主)＝「主はわが神」〕。最後の言葉は、「わが神、わが神、なぜわたしをお見捨てになったのですか」という言葉でした。こんな嘆きの言葉で主イエスがその生涯を終えるはずが



ない、と考える研究者がいます。その人たちは、主イエスはこのあと十字架上で、続けて詩編22編の最後まで朗唱されて、この詩編の最後が示す希望を口にしながら絶命したと説明します。興味深い説明ですが、聖書にないことを、あまり大幅に付け加えてはいけません。主イエスは「わが神、わが神、なぜわたしをお見捨てになったのですか」と絶叫したのち息を引き取ったのです。そこにこそ大切な意味があるのです。

実はマルコ福音書が描く受難物語は、人間が神を棄てていく物語なのです。民衆がイエスを棄てました。他人様だから当然でしょうか。他人がイエスを棄てました。しかし弟子たちもイエスを棄てました。主を愛していたはずの者たちがイエスを棄てたのです。そして権力者がイエスを棄てます。正義を標榜する政治がイエスを棄てるのです。マルコの十字架の描写

は、人がイエスを棄てていく放棄（遺棄）の出来事を、連続的な描写でたたみかけてきます（それはまるで連鎖祈禱、連禱のようです）。それによってマルコは、その死におけるイエスの孤独を鮮やかに描いています。次第にクレッシェンドしながら、この物語は、世界の絶望を示し、その救い主がこの世界と正反対の位置にあり、この世界に完全に相反目していることを明らかにします。「誤解や裏切りや否認、そして逃亡などによるイエスの弟子たちの失敗は、十字架の場面になってそのどん底に到る。……弟子は一人も存在しない。イエスの放棄は……その頂点に達するのである」（ウィリアムソン、邦訳438）。カール・バルトという神学者は、「そこにはイエスという名のキリスト者以外の一人のキリスト者もいない」と語りました。



ピラトの裁判の箇所を読んだときにご紹介したパール・ラーゲルクヴィストの『バラバ』(1950)という小説は、神学の上でもかなり重要なテーマをもった小説です。信仰における「疑い」「懷疑」の問題を重要なテーマとしています。しかしその疑いを通して、また、その疑いの裏側に見えてくる信仰を表現します。作者は、バラバという主人公に、信仰におけるさまざまな



疑い・疑問を集中して背負わせます。その一つが、神の子が「わたし」の罪の贖いのために死んだという問題です。罪の贖いつまり贖罪信仰への懷疑をラーゲルクヴィストはバラバの考えとして次のように表現します。

「神の子！ どうして。あの男は神の子なんかじゃなかったのだ。もし神の子だったら、いやと思えば磔刑^{はりつけ}なんかになる必要はなかったはずではないか。してみると、あの男は自らそれを望んでいたに違いなかったのだ。本当に奇妙な、気味の悪いことだ——彼は苦しみを望んで^はいたに違いない。もし彼が真実、神の子だったとしたら、

磔刑^{はりつけ}を免れることはきわめて容易なことであったはずだからである。しかし彼は、それを免れたくはなかったのだ」(54f)と語られます。そして作者もまたこう説明を入れます。「いやだ、彼はこんなふうにして苦悩を求めた者、自ら十字架についた者が好きになれなかった。バラバはどうしても彼が気に入らなかった！」(56)。

小説『バラバ』は罪の贖い、神学用語で言えば「贖罪論」が「わたしたち」のためにという複数形のつまり教会の集団的信仰から、

「わたし」(バラバ)のためにイエスは死んだという個人的な信仰へ向かう信仰の「個人化」のプロセスを追いかけるのです。そのためにバラバは盗賊団の頭目のような人物ですが、彼をその内面において人々から孤立した、その出生からして——詳しくお話ししている時間がありません——きわめて孤独な人物として登場させます。そ



してその個人化へのプロセスへの一端をこう描きます。「彼〔イエス〕は人たち〔人々〕



のために死んだのだ、と彼ら〔キリスト者たち〕はいていた。あるいはそうだったかも知れない。だが、本当はバラバのために死んだのであって、それはだれも否定できないことだった！

バラバは実はほかの人たちよりも、ほかのだれよりもずっと彼に近く、まったく違った意味で彼とつながっていたのだ。人たち〔人々〕にはバラバのことはどうしてもよかったとはいえず！彼バラバは選ばれた——苦しむ必要のないように、それを逃れるように選ばれたのだった。そういてさしつかえない。バラバは真に選ばれた男、神の子の代わりに——彼〔イエス〕がそれを望み、彼の命によって赦免された男なのであった。人たち〔人々〕はもちろんそんなことをすこしも知らなかったが！」(55f)。「そうなのだ、彼〔バラバ〕はたしかに神の子がそのために死んだ人間だったので

ある！」(57)。

作者は論理的にそうなのだというのはなく、実感として(心情的に信仰的にも)そうなのだバラバに理解させるために、特別なキリスト者を2人用意します。むしろバラバは教会的キリスト者たちからは「バラバのせいで主イエスは生命を奪われたのだ」と揶揄されて、距離を置くことになります。その2人の特別なキリスト者がバラバをキリストになく役割を果たすのですが、これによって信仰における「愛」の問題が導入されます。その1人が先々週ご紹介したラケル。原作では「^{みつぐち}兎唇女」とだけ呼ばれていて、名前がありません。〔この小説では、バラバとサハクとイエスだけが名前で出てきますが、ペトロでさえその名前は明記されません。〕彼女は、バラバの情婦というか、むしろバラバの偽りの愛の言葉の犠牲者で〔バラバの食欲と性欲を満たすために〕都合良くバラバに使われる小さな障害を持った女性で、バラバの子を死産した可能性がほのめかされます。彼女はイエスの復活を目撃します〔彼女はおそらくマグダラのマリアに重ねられている〕。そしてその証言を公にしたために、

ついにはユダヤ人宗教指導者に捕らえられ裁かれて、石打の刑で処刑されます。その処刑を執行している律法学者を人陰に隠れて一刺しで殺してしまう、という形で――歪んだ形ではあるのですが――バラバの愛が表面化します。

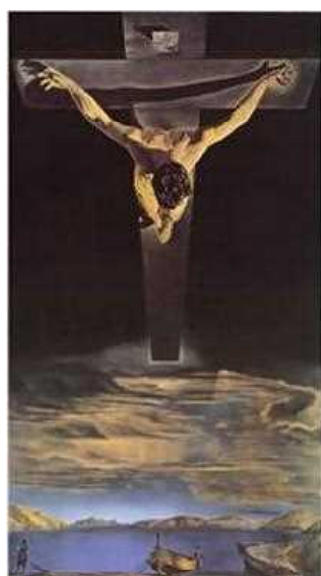
もう1人は物語の後半に登場するサハク（アルメニア人）というキリスト者で、シシリー島で囚人としてバラバと鎖でつながれ、2人一組で囚人として銅山の労役につかされます。バラバがはじめて心を開いた人間です。バラバは強制的にサハクと労役と生活を共にするうちにキリスト信仰に傾き（傾斜し）、あるとき自分が首からさげている奴隷鑑札にサハクの鑑札に描かれている“XI”（キリストス・イエースス）という文字をサハクに頼んで刻んで貰います。これでバラバもキリスト者だ、めでたし、めでたし……とはいきません。ある時主人であるローマ総督に呼び出されて「お前たちは奴隷鑑札が示すように皇帝の奴隷なのか、それとも“XI”の奴隷なのか」と問われて、サハクはキリストへの信仰を告白して処刑されていきます。一方バラバは信仰

を否定して、難を逃れます。実際のバラバの信仰告白は物語の一番最後に至るまで、紆余曲折を経ることになります。〔これについては先々週お話ししました。〕作者ラーゲルクヴィストが兎唇女とサハクという2人を登場させた狙いは明らかです。つまり、人をキリストにつなぐのは、論理的な優越性や整合性、文化的な卓越性や、人を圧倒するような偉大な業やまた業績ではなくて、キリスト者の「愛」だと言いたいからなのです。教会が「愛」の共同体として成長するとき、おのずと宣教が前進するのです。バラバは最後に、800人近いキリスト教徒が放火の嫌疑をかけられて処刑される中、十字架上で一人で死んでいく自分を「お前さんに委せるよ、おれの魂を」と十字架上の主イエスに結びつきます。



「わが神、わが神、なぜわたしをお見捨てになったのですか。」マルコの受難物語は、徹底して主イエスが棄てられていく物語なのです。しかし、そこに神の愛が表されているのです。マルコが描く救いの物語を解く言葉

を主イエスは残しました。10章45節の言葉です。「10:45 人の子は仕えられるためではなく仕えるために、また、多くの人の身代金として自分の命を献げるために来たのである。」「身代金」は「贖いの代価」と訳す方が良いでしょう。それは奴隷になっている者(時には債務奴隷となった家族)や戦争で捕虜になった者を買戻すために支払われる



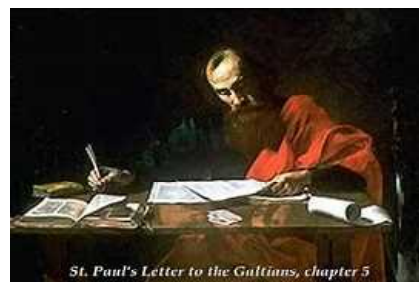
ものです。わたしたちの奴隷状態、罪の束縛から、わたしたちを買戻すために、キリストの命という代価が払われます。それは徹底した棄

て銭となったのです。

だから十字架の物語は、愚かにさえ見えるのです。パウロはそれを知っていました。コリントの信徒への手紙一1章18-25節。

「一コリ1:18 十字架の言葉は、外目には(滅んでいく者にとっては)愚かなものですが、わたしたち救われる者には神の力です。1:19 それは、こう書いてあるから

です。『わたしは知恵ある者の知恵を滅ぼし、／賢い



者の賢さを意味のないものにする。』1:20 知恵のある人はどこにいる。学者はどこにいる。この世の論客はどこにいる。神は世の知恵を愚かなものにされたではないか。1:21 世は自分の知恵で神を知ることができませんでした。それは神の知恵にかなっていません。そこで神は、宣教という愚かな手段によって信じる者を救おうと、お考えになったのです。1:22 ユダヤ人はしるしを求め、ギリシア人は知恵を探しますが、1:23 わたしたちは、十字架につけられたキリストを宣べ伝えています。すなわち、ユダヤ人にはつまずかせるもの、異邦人には愚かなものですが、1:24 ユダヤ人であろうがギリシア人であろうが、召された者には、神の力、神の知恵であるキリストを宣べ伝えているのです。1:25 神の愚かさは人よりも賢く、神の弱さは人よりも強いからです。」

イエスが息を引き取った午後、

正確には第九の時(午後3時)、暗闇が3時間続いた後に、わたしたちは、罪悪感で心をもぎ取られるような悲痛な思いをします。

「**わが神、わが神、なぜわたしをお見捨てになったのですか。**」この言葉が、わたしたちのために、いや、わたしのために発せられたことを知るとき、そのことに心を開くとき、「お前さんに任せるよ」と心が頷くとき、十字架の言葉は、ミステリアスリイ神秘的にわたしたちを浄化し、わたしたちの自由に基礎を与えます。わたしたちは、使徒信条の中心にイエスのぞっとするような生涯の結末を置いたのです。それは無実の死を告げる弔鐘を鳴り響かせるためです。「苦しみを受け、十字架につけられ、死んで、葬られ、陰府に下り…。」もしわたしたちが人間存在のこの暗い中心部にわたしたちが関わっているという事実に取り組むことに失敗するなら、わたしたちは自分たちの救いを理解しないでしょう。ただわたしたちが十字架を自分のものとするとき、単なる言い聞かせやマインドコントロールとは違うものとなるときにはじめて、真に心を浄化するものとなるのです。わた

したちの解放を告げる鐘の音をたゆまず響かせてきた、あの偉大な福音、あの偉大なよきおとずれが、聞こえはじめるのです。

そしてローマの百人隊長の言葉が、自分の言葉となるのです。「本当に、この人は神の子だった。」そしてまたバラバが十字架でもらした信仰告白がわたしたちの告白となるのです。「お前さんに委せるよ、おれの魂を。」

新しい一週間も、わたしたちのために死に、また今も生きておられる主イエスとともに新しく歩んでまいりましょう。祈ります。

2019.9.22 日本基督教団千歳丘教会



15:25 イエスを十字架につけたのは、午前九時であった。

15:26 罪状書きには、「ユダヤ人の王」と書いてあった。

15:27 また、イエスと一緒に二人の強盗を、一人は右にもう一人は左に、十字架につけた。

15:28 （※底本に節が欠落 異本訳）こうして、「その人は犯罪人の一人に数えられた」という聖書の言葉が実現した。

15:29 そこを通りかかった人々は、頭を振りながらイエスをののしって言った。「おやおや、神殿を打ち倒し、三日で建てる者、

15:30 十字架から降りて自分を救ってみろ。」

15:31 同じように、祭司長たちも律法学者たちと一緒に、代わる代わるイエスを侮辱して言った。「他人は救ったのに、自分は救えない。

15:32 メシア、イスラエルの王、今すぐ十字架から降りるがいい。それを見たら、信じてやろう。」一緒に十字架につけられた者たちも、イエスをののしった。

15:33 昼の十二時になると、全地は暗くなり、それが三時まで続いた。

15:34 三時にイエスは大声で叫ばれた。「エロイ、エロイ、レマ、サバクタニ。」これは、「わが神、わが神、なぜわたしをお見捨てになったのですか」という意味である。

15:35 そばに居合わせた人々のうちには、これを聞いて、「そら、エリヤを呼んでいる」と言う者がいた。

15:36 ある者が走り寄り、海綿に酸いぶどう酒を含ませて葦の棒に付け、「待て、エリヤが彼を降ろしに来るかどうか、見ていよう」と言いながら、イエスに飲ませようとした。

15:37 しかし、イエスは大声を出して息を引き取られた。

15:38 すると、神殿の垂れ幕が上から下まで真っ二つに裂けた。

15:39 百人隊長がイエスの方を向いて、そばに立っていた。そして、イエスがこのように息を引き取られたのを見て、「本当に、この人は神の子だった」と言った。

15:40 また、婦人たちも遠くから見守っていた。その中には、マグダラのマリア、小ヤコブとヨセの母マリア、そしてサロメがいた。

15:41 この婦人たちは、イエスが

ガリラヤにおられたとき、イエスに従って来て世話をしていた人々である。なおそのほかにも、イエスと共にエルサレムへ上って来た婦人たちが大勢いた。

15・25 ἦν δὲ ὥρα τρίτη καὶ ἐσταύρωσαν αὐτόν.

15・26 καὶ ἦν ἡ ἐπιγραφή τῆς αἰτίας αὐτοῦ ἐπιγεγραμμένη, Ὁ βασιλεὺς τῶν Ἰουδαίων.

15・27 Καὶ σὺν αὐτῷ σταυροῦσιν δύο ληστές, ἓνα ἐκ δεξιῶν καὶ ἓνα ἐξ εὐωνύμων αὐτοῦ.

(v.28)

15・29 Καὶ οἱ παραπορευόμενοι ἐβλασφήμουν αὐτὸν κινοῦντες τὰς κεφαλὰς αὐτῶν καὶ λέγοντες, Οὐὰ ὁ καταλύων τὸν ναὸν καὶ οἰκοδομῶν ἐν τρισὶν ἡμέραις,

15・30 σῶσον σεαυτὸν καταβάς ἀπὸ τοῦ σταυροῦ.

15・31 ὁμοίως καὶ οἱ ἀρχιερεῖς ἐμπαίζοντες πρὸς ἀλλήλους μετὰ τῶν γραμματέων ἔλεγον, Ὑποταγέτω ὁ Χριστὸς τῷ βασιλεὺς Ἰσραὴλ καταβάτω νῦν ἀπὸ τοῦ σταυροῦ, ἵνα ἴδωμεν καὶ πιστεύσωμεν. καὶ οἱ συνεσταυρωμένοι σὺν αὐτῷ ὠνείδιζον αὐτόν.

15・32 ὁ Χριστὸς ὁ βασιλεὺς Ἰσραὴλ καταβάτω νῦν ἀπὸ τοῦ σταυροῦ, ἵνα ἴδωμεν καὶ πιστεύσωμεν. καὶ οἱ συνεσταυρωμένοι σὺν αὐτῷ ὠνείδιζον αὐτόν.

15・33 Καὶ γενομένης ὥρας ἑκτῆς σκότος ἐγένετο ἐφ' ὅλην τὴν γῆν ἕως ὥρας ἐνάτης.

15・34 καὶ τῇ ἐνάτῃ ὥρᾳ ἐβόησεν ὁ Ἰησοῦς φωνῇ μεγάλῃ, Ελωι ελωι λεμα σαβαχθανι; ὃ ἐστὶν μεθερμηνευόμενον Ὁ θεὸς μου ὁ θεός μου, εἰς τί ἐγκατέλιπές με;

15・35 καὶ τινες τῶν παρεστηκότων ἀκούσαντες ἔλεγον, Ἴδε Ἡλίαν φωνεῖ.

15・36 δραμῶν δέ τις (καὶ) γεμίσας σπόγγον ὄξους περιθεὶς καλάμῳ ἐπότιζεν αὐτόν λέγων, Ὑποταγέτω ὁ Χριστὸς τῷ βασιλεὺς Ἰσραὴλ καταβάτω νῦν ἀπὸ τοῦ σταυροῦ, ἵνα ἴδωμεν καὶ πιστεύσωμεν. καὶ οἱ συνεσταυρωμένοι σὺν αὐτῷ ὠνείδιζον αὐτόν.

15・37 ὁ δὲ Ἰησοῦς ἀφείς φωνὴν μεγάλην ἐξέπνευσεν.

15・38 Καὶ τὸ καταπέτασμα τοῦ ναοῦ ἐσχίσθη εἰς δύο ἀπ' ἄνωθεν ἕως κάτω.

15・39 Ἰδὼν δὲ ὁ κεντυρίων ὁ παρεστηκὼς ἐξ ἐναντίας αὐτοῦ ὅτι οὕτως ἐξέπνευσεν εἶπεν, Ἀληθῶς οὗτος ὁ ἄνθρωπος υἱὸς θεοῦ ἦν.

15・40 Ὦσαν δὲ καὶ γυναῖκες ἀπὸ μακρόθεν θεωροῦσαι, ἐν αἷς καὶ Μαρία ἡ Μαγδαληνὴ καὶ Μαρία ἡ Ἰακώβου τοῦ μικροῦ καὶ Ἰωσήτος μήτηρ καὶ Σαλώμη,

15·41 αἱ ὅτε ἦν τῇ Γαλιλαίᾳ
ἠκολούθουν αὐτῷ καὶ διηκόνουν αὐτῷ,
καὶ ἄλλαι πολλαὶ αἱ συναναβάσαι
αὐτῷ εἰς Ἱεροσόλυμα.